

家康が築いた物流・情報ネットワーク

東海道五十三次宿駅を訪ねて



徳川家康肖像画：日光東照宮蔵

平成20年春、新名神高速道路の一部（草津～亀山間）が開通。「名神高速道路」は中山道沿いに設けられていますが、新たに開通した「新名神高速道路」は旧東海道に沿うように建設されています。東海道五十三次でお馴染みの旧東海道は、江戸時代日本の東西を結ぶ重要な幹線道路でした。江戸日本橋～京都三条間に設けられた53カ所の宿駅^{*1}では、公文書や物資の輸送を行う人足・伝馬がともに最大数配備されていたそうです。徳川家康が築いた情報・交通・物流ネットワークの足跡をたどるため、3つの宿場町を訪ねました。

^{*1} 宿駅とは、街道沿いの集落で、旅人を宿泊させたり、荷物を運搬するための人・馬を集めてある宿場のこと。1番目の品川宿から、京都に至る最後の宿駅の大津宿までの53宿を指す。



平成20年9月現在

「宿駅伝馬制度」を導入・拡充した徳川家康

慶長5年（1600年）、関ヶ原の合戦に勝利した徳川家康は、公用の物資や公文書などのやりとりをより迅速に行うため、翌年に「伝馬の制」（宿駅伝馬制度）を敷き、街道の宿場ごとに人や伝馬^{*2}を配備。各宿駅間を交替で継ぎ送りして、それらを運ばせました。そして慶長9年（1604年）には日本全国の本格的な道路整備を進めていきました。

宿場の役割の一つは大名や公家、幕府役人のための本陣や脇本陣、一般の旅人のための旅籠屋などの宿泊・休息所。

そしてもう一つが問屋や年寄りと呼ばれた町の名士たちが行う物資輸送としての役割です。とりわけ東海道は、江戸～京都～大阪を結ぶ重要なルートだったこともあり、交通量が激増し、人足100人、馬100頭に増やしたということです。宿場には、次第に商家や接客空間のある町屋なども現れて活気づき、スピーディな情報・物流のネットワークが構築されました。そんな歴史に思いを馳せながら、最初の目的地、石部へと足を運びました。 ^{*2} 幕府の公用を行うため街道の宿駅間を乗り継ぐ馬のこと。

いしべしゆく
石部宿

江戸行きの際は、多くの旅人が「京立ち石部泊り」

湖西市・石部の街道は、和銅～天平の時代に石部金山の金の運搬ルートとして開かれ、平安時代末期からは交通路として栄えてきました。東海道五十三次の51番目の宿駅である石部は、江戸方面へ向かい京都を朝出発すると、ちょうど夕方頃に到着することから「京立ち石部泊り」と言われてきました。昔の旅人たちは、この約38kmを8～10時間で歩くペースが標準的だったようです。

その旧東海道のまちなみは、JR石部駅前から少し歩いた先に広がっていました。かつては本陣、旅籠を含む458軒の商家や町屋が建ち並んでいたそうですが、残念ながら現在は、番兵が通行人を見張っていたという見附や、本陣などもその姿をとどめてはいません。しかし、石碑や当時の建物を偲ばせる茶屋などの様子に、かつての雰囲気を垣間見ることができます。また、新たな発見もありました。「宿駅伝馬制度」制定前の慶長2年（1597年）、秀吉が長野善光寺の仏願を京都大仏殿に遷した際、既に石部ではこの制度が実施されていたようです。



本陣跡の石碑



「石部宿場の里」。江戸時代末期の関所、旅籠、商家などがリアルに復元されています。

貴重な土木遺産と、弘法大師の伝説に遭遇

石部から、次の宿駅・水口までは約13.7km。旧東海道を東に進むとツタがびっしり絡まるレトロな石造りのトンネルが2ヶ所あります。明治19年（1886年）築造の「由良谷川隧道」と明治17年（1884年）に滋賀県初の道路トンネルとして築造された「大沙川隧道」です。両隧道とも「日本の近代土木遺産」として、高く評価されています。隧道の上には天井川（土砂の流出が増え川床が高くなった川）が流れており、洪水を防ぐため次第に堤防を高くしていった歴史がうかがえます。その「大沙川隧道」の中を通ると、心地よい涼やかな風を感じました。

また、その堤上には、樹齢約750年、樹高約26mを誇る大杉があります。かつて弘法大師がここを訪れ、食事後に使用した杉箆を刺しておいたものが成長したという言い伝えがあるそうですが、悠久の時の流れを生き抜いてきたと思わせるだけの迫力がありました。



市指定文化財となっている「弘法杉」



半円型のアーチが美しい「大沙川隧道」



近くに祀られている弘法大師像



城下町としての名残りがあちこちに

甲賀市・水口は中世から伊勢参宮道のまちとして開けていました。関ヶ原の合戦後、徳川の直轄地になり、東海道の宿駅に指定されたそうです。新たに築かれた水口城を中心としたまちなみは東西2kmに及んだと言われ、規模的には3宿中で最大とされています。水口宿は、中山道の分岐点である草津宿をしのぐものでしたが、宿泊施設が少なく、三代将軍家光が寛永11年(1634年)に新たに宿館を築かせました。水口城(水口御茶屋)の誕生です。

水口城は街道から離れ、少し南に歩いていくと見えてきました。明治維新後、建物や石垣の大半は処分され、



かつて水口城は湧水の堀をめぐらせたことから碧水城とも呼ばれていました。



水口宿の面影を残す本陣・脇本陣跡

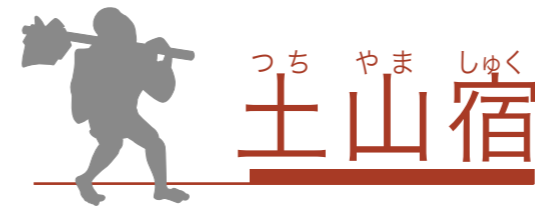


御高札場は近年まで「札の辻」と呼ばれていました。

旧本丸は学校敷地になったそうですが、将軍家宿館遺跡として再評価され、現在はかつての矢倉を模した資料館として、まちのシンボルとなっています。また、その近くには「水口歴史民俗資料館」もあります。

旧東海道に戻り水口本陣跡を訪ねると、現在は石碑を残すのみ。当時の本陣表門は貴人宿泊の格式を表していたそうです。幕府の法度、掟書などを板に書き一般大衆に法令通知していた御高札場には、当時を再現した高札が立っていました。

水口は、松尾芭蕉の故郷である伊賀上野とも伊賀道で通じており、芭蕉も京都や江戸への往還の際にしばしば利用していたようです。貞享2年(1685年)の春、旧友と再会したことを「命二つの中に生きたる桜かな」の名句に残しており、しばらく水口に滞在したと伝えられています。



峠の近くにある旅人のオアシス



旧土山宿の街並み



「東海道伝馬館」では、伝馬の世話や、運ぶ荷物の重さを計測する風景なども展示



日本を代表する浮世絵師、歌川広重作「東海道五十三次」より(3点とも)

土山宿までの街道沿いには旅人たちに木陰を提供した松並木などが残っている所もありました。

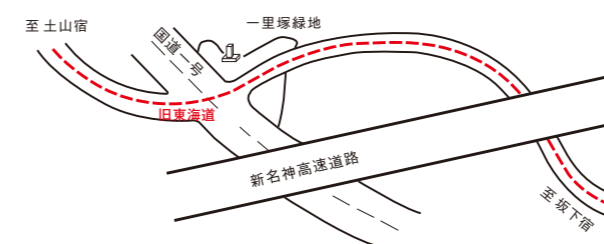
甲賀市・土山は、鈴鹿山脈の西側に広がる山間のまちです。箱根峠と並び難所と言われる鈴鹿峠を行き来する旅人の休憩場所として賑わいました。東は田村川から西は野洲川まで細長く連なっており、本陣や問屋場の設置されたほぼ中央あたりが、この土山宿の中心であったことがうかがえます。旧土山本陣付近の軒を連ねたまちなみや、格子戸のある風景の中を歩いていると、当時の趣が感じられます。

「東海道伝馬館」を訪れると、記帳を行う宿役人や馬子などの様子がわかる問屋場が、原寸大の人形や馬で復元展示されていました。各地から届いた荷物を、このように伝馬などに積んで、次の宿駅まで送り届けていたのでしょう。問屋場内には、地名の書かれた多くの表示板が室内に掛けられていました。また、「土山歴史民俗資料館」にはかつての旧東海道、鈴鹿峠の貴重な写真も展示されており、国道1号線へと、変わりゆく時代の様子が確認できました。

そして、物流を担う役割は新名神高速道路に継承

旧東海道を進み、鈴鹿峠付近までやってくると、過去・現在・未来が交差する一里塚にたどり着きました。見上げれば、頭上に国道1号線と交差している新名神高速道路が。そして、旧東海道も、新名神高速道路に沿って三重県の坂下宿方面へと続いています。新名神高速道路の開通で、物流だけでなく、情報文化・産業面の交流もより活発になっていくはずだ。

道はいつの時代も進化し、私たちの暮らしを支え続けてきました。より快適で便利な交通網をという人々の願いがある限り、道と人のつながりは、これからも続いていく。そんな思いを新たに、旧東海道の旅でした。



新名神高速道路



旧東海道と同様に、国道1号線と交差している新名神高速道路。説明の看板が設置されています。